

コロナ禍で考える観光の社会的意義 — 大学生によるユニバーサルツーリズムの実践から —

竹田 茉耶
(地域文化学科)

Social Significance of Tourism in the COVID-19 Pandemic Context:
Accessible Tourism Practiced by Undergraduate Students

Maya TAKEDA

キーワード：コロナ禍、観光の権利、ユニバーサルツーリズム、視覚障がい者
Coronavirus pandemic, Right to tourism,
Accessible tourism, Visually impaired people

1. はじめに

国連世界観光機関（UNWTO）が定める「世界観光倫理憲章」¹⁾（1999）は、第7条に「直接的に、個人的に、地球の魅力を発見し、楽しむという側面は、全世界の住民に平等に開かれている権利である。ますます広がる国内、国際観光への参加は、持続的に増大している自由時間の最も良い表れのひとつであると見做されるべきであり、この観光への参加に障害となるものは取り除かれるべきである」として、「観光の権利」²⁾を掲げている（国連世界観光機関 2021）。一方で、観光の現実に目を向けるとそこには少なからず「観光機会の格差」が存在している。「世界観光倫理憲章」が定めるように、観光を楽しむことは何人にも保障されるべき権利であり、そうした機会の格差解消に取り組むことは観光に関わる人々に課せられた責務といえる。加えて、旅行に制約やためらいを感じている人々に対する観光需要の喚起や観光機会の創出は、観光産業の発展においても極めて重要なテーマといえる。そうした中であって、コロナ禍は移動の自由すなわち「観光の自由」に制限をもたらすこととなり、図らずも観

光のあり方やその意義が再考される状況を生じさせた³⁾。

本稿では、こうした事態においていま一度、観光の権利や意義について考えることを企図して取り組んだユニバーサルツーリズムの実践を振り返り、コロナ禍における観光の社会的意義について考察する。

2. 実践の概要

本実践は、筆者が担当する地域文化プロジェクト I（観光学ゼミ）の3年生の春学期ゼミの活動として取り組んだものである。「コロナ禍で考えるユニバーサルツーリズム—観光を楽しむ権利—」（以下、プロジェクトまたは本プロジェクトとする）と題して、いやタクシー・東出雲観光バス（以下、東出雲観光バスとする）と共同で実施した⁴⁾。プロジェクトの目的を、観光の機会を阻害されている人々に「観光を楽しむ機会を提供する」と定め、以下の4つのステップで取り組んだ。

- ① ユニバーサルツーリズム概念の検討
- ② 対象者の設定とニーズの把握

- ③ コンテンツの造成
- ④ モニターツアーの実施と検証

①～③は4月～7月上旬にかけて実施し、④のモニターツアーは視覚に障がいのある方々を対象として、7月29日(金)に松江市東出雲町上意東地区において実施した。モニターツアーには盲導犬ユーザーの方1名を含む3名の視覚障がい者の方々と2名の介助者の方々に参加いただいた。なお、本プロジェクトについては、インスタグラムとフェイスブックを用いて随時活動の紹介を行った。

3. ユニバーサルツーリズムとは何か

ユニバーサルツーリズムとは、すべての人が楽しめるよう創られた旅行であり、高齢や障がい等の有無にかかわらず、誰もが気兼ねなく参加できる旅行とそうした旅行の実現を目指す実践を指す(観光庁 2022)。観光庁では、2008年に観光のユニバーサルデザイン化の必要性やその効果等を広く認知してもらうための手引き集及びリーフレットが作成された。これを皮切りに、ユニバーサルツーリズムに対応した観光地づくりを進めるための「地域の受入体制強化マニュアル」(2013年)や「宿泊施設におけるバリアフリー情報発信のためのマニュアル」(2018年)の作成、「バリアフリー旅行サポート体制の強化に係る実証事業」(2020年)など、地方自治体やNPO等の関係者の協力の下、地域の受入体制強化や旅行商品の造成・普及のための取組など、ユニバーサルツーリズムの普及・促進に向けた取り組みが進められている(観光庁 2022)。地域の受け入れ体制としては、2000年代に入って以降、伊勢志摩バリアフリーセンターなど、小規模・零細なNPO法人が20か所以上⁵⁾出現している(秋山・大西・佐藤 2013)。

一方、欧米ではユニバーサルツーリズムという用語ではなく、アクセシブルツーリズムの用語や概念表記が一般的である。吉田ら(2016)は、日本の「ユニバーサルツーリズム」の概念は、アメリカを起点とするユニバーサルデザイン及びバリアフリー概念と通底しているとし、そこには「画一化」とい

う基本的な思想があるとする。その上で、観光の本質は「多様性」にあることをふまえると、本来はインクルーシブツーリズムの概念を用いることが適切であると指摘する。加えて、観光とは「異文化間における人の交流」を意味し、人種や文化も含めて世界の多様性を認める、それを前提とする人間の行為に他ならず、ゆえに、画一化やユニバーサルizmという思想を基調とする「ユニバーサルizm」という用語そのものに矛盾と限界があるのではないかと、との疑問を投げかけている(吉田・山川・松山 2016)。

本プロジェクトにおいてもこの点に関心を置き、ユニバーサルizmの意義と課題を検討する。

4. ユニバーサルizmの対象は誰か

1) 障害のある人もない人もともに楽しむ

プロジェクトの目的である「観光の機会を阻害されている人々に観光を楽しむ機会を提供する」を実践するにあたり、まずは「観光の機会を阻害されている人々」について検討を行った(図1)。

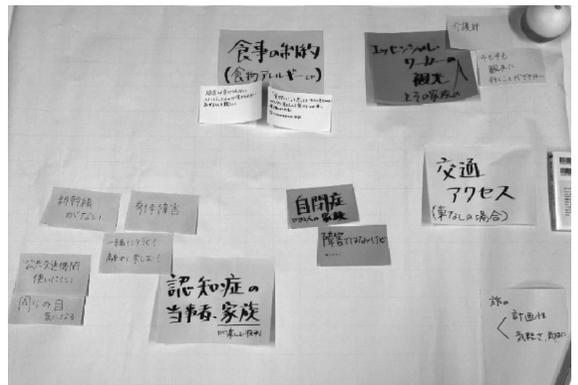


図1 ユニバーサルizmの対象者についての検討(2022年4月15日 筆者撮影)

学生からは、認知症や自閉症の当事者とその家族、食物アレルギー等のために食事に制約がある人、交通の便が悪い場所に暮らす人々、といった意見のほか、介護職に就く人とその家族など、コロナ禍ならではの指摘もあった。その後、学生たちが検討した内容をふまえて東出雲観光バスとオンラインミーティングを行った(図2)。



図2 東出雲観光バスとのオンラインミーティング
(2022年4月22日 筆者撮影)

その上で、ユニバーサルツーリズムの取り組みについて理解を深めるため、ユニバーサルツーリズムに先進的に取り組んでいる松江しんじ湖温泉街にある、なにわー水を見学させていただいた(図3)。



図3 なにわー水の勝谷社長からバリアフリーの設備が整った浴場について説明を受ける学生
(2022年5月20日 筆者撮影)

なにわー水では「バリアフリー」と「旅館の情緒／非日常空間性」の両立を理念としており、館内は障害の有無にかかわらず快適で楽しめる空間づくりが行われていた。廊下の壁にあしらわれた組子細工は海外の美術館の取り組みを参考に取入れたもので、触って楽しむ仕掛けの一つである(図4)。

なにわー水の施設見学とその後に設けていただいた勝谷社長との意見交換の内容等をふまえ、本プロジェクトのコンセプトを「障害のある人もない人も楽しめるものをつくる」としたが、その中心に「視覚に障がいがある人々」を置き、コンテンツの検討を進めることとした(図5)。「視覚に障がいがある

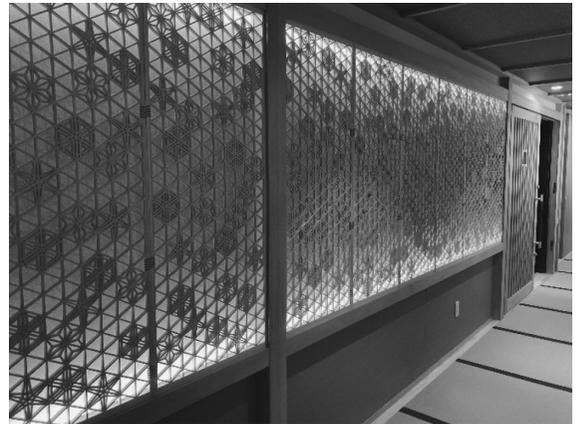


図4 廊下の壁にあしらわれてた組子細工
(2022年5月20日 筆者撮影)

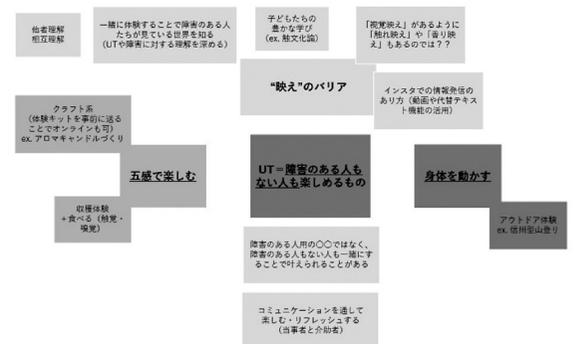


図5 プロジェクトのコンセプトの検討
(学生たちの議論をもとに筆者作成)

人々」を中心にしたのは以下のような理由からである。

なにわー水の廊下に設置された組子細工や広瀬浩二郎氏の「触文化」論(広瀬 2017, 2020)に触れる中で、また障がいを持つ人々にとってのバリアについて考える中で、「視覚」に関心が向いた。そうした中、観光に関して言えば、地域の魅力を伝えたり、受け取ったりする際には私たちは多くを視覚的な情報に頼ってしまっているが、視覚に障がいがある人々は触れることや嗅ぐこと、訪問先で接する人たちの声や雰囲気といったことから地域の魅力を感じとっているのではないだろうか。一方で、視覚以外の感覚を通して感じ楽しむことは視覚に障がいがない人たちにとっても大切なことではないだろうか。あるいは、昨今は「SNS映え」(『広辞苑』

によると「映え (はえ)」とは「目にうつる感じのよいこと」がもてはやされているが、そこには情報をめぐるバリアが存在しているのではないだろうか⁶⁾。そうであれば、「五感で感じる」ということを通して、視覚以外の「映え」に気づく (= 他者の世界を知る) ことができるのではないだろうか。このような問題意識から、上記のようなコンセプトを設定するに至った。

2) 視覚障がい者の観光実態と観光ニーズ

コンテンツを造成するにあたり、まずは視覚障がい者の観光実態と観光ニーズを調査した。

調査は「COTRAVEL (コトラベル)」という旅行記投稿サイトを用いて行った。同サイトは、障がいがある人や高齢者、マタニティの人々など身体的・社会的バリアに悩む人のための旅行記投稿サイトであり、ここに投稿された旅行記のうち、視覚に障がいを持つ方が投稿したものをピックアップし、その内容を分析した (表1)。旅行記の内容から、視覚に障がいがある方々は、観光において視覚以外

の感覚を研ぎ澄ませて観光を楽しんでいること、日頃できない体験をしてみたいというニーズを持っていること、外出や移動の際には、明るさや段差などが気になる点であること、また周囲からの声かけを求めていることがうかがえた。

5. 五感で楽しむ体験

1) 体験型コンテンツの検討

これまでの検討をふまえ、「五感で楽しむ」をキーワードに「アロマ石鹸づくり」、「陶芸体験」、「音楽鑑賞&演奏」、「農業体験」の4つのコンテンツ案を抽出した (図6、7、8、9)。いずれも視覚以外の感覚で楽しむことを意識しつつ、安全面も考慮しながら内容を検討した。

2) モニターツアー開催地の検討

モニターツアーの開催地は、松江市の中心部から車で30分ほどの松江市東出雲町上意東地区にある畑集落とした。畑集落は干し柿の里として知られ、およそ450年前、尼子氏と合戦を繰り広げた毛利軍

表1 視覚障がい者の観光の特徴とニーズ

五感で感じる	<ul style="list-style-type: none"> ・一般的な感想＝視覚的な感想という無意識の認識 (画廊で作品の感触を述べることに躊躇い) ・視覚障害者にとって博物館は展示物に触れられず暗くてよく見えない場所 (あまりいい思い出がないという声をよく聞く) ・触れる博物館は展示物に触って楽しめる ・(野菜の収穫は) 弱視の人にとっては目で見ると手ですぐ探せる。顔を近づけると枝や葉で目を突く可能性があるため手探りで探す方が安全。 ・匂いや感触、音を楽しむ (食べ物屋、動物に触れる、竹林に触る、風の音、抹茶を立てる音・香り) ・「時の鐘」(環境省「残したい“日本の音風景100選”) ・「菓子屋横丁」(環境省「かおり風景100選」) ・「足踏み健康ロード」
マイペースで楽しめる	<ul style="list-style-type: none"> ・一人焼肉は人目を気にせず「自分のペース」で食べられる ・貸切制のボルダリング ・オンラインツアーの場合、カメラのズーム機能を使って一つ一つ確認できる (ゆっくりきちんと見られる)
日頃できない体験	<ul style="list-style-type: none"> ・動物と触れ合えるカフェ (ペットを飼いたいのが難しいため)
明るさや段差	<ul style="list-style-type: none"> ・古民家を改装した建物は薄暗く、段差が多い (網膜色素変性症) ・日差しが強いときはサングラスをかけないと周囲の状況が把握しづらい (網膜色素変性症) ・トイレは明るいだけで安心感 (先天性白内障: 右0.06 左見えない)
周囲の声かけ	<ul style="list-style-type: none"> ・車の音で周囲の状況が把握しにくい時があるため、声をかけてほしい ・定員さんの親切な対応に助けられる部分多い

◆アロマ石鹸づくり体験

【手順】

- 1.釜を温め
- 2.湯煎で耐熱容器に入れたグリセリンソープを溶かす
- 3.紙コップに移してオイル、着色料の順に混ぜる
- 4.型に押し固める（冷却後）
- 5.固まったら型からはずす
- 6.ラッピング

やけどしないようにオイル選びと着色の作業から行ってもらおう

視覚に障害のある方でも楽しめる香り
リラックス効果
比較的簡単な作業
思い出を持ち帰ることができる
材料の多くが100円ショップで揃う

【材料・必要なもの】

- ・グリセリンソープ 500g(400円前後)
- ・シリコン型 500g(400円前後)
- ・アロマオイル 100ml(400円前後)
- ・顔料 40ml(400円前後)
- ・精油 40ml(400円前後)
- ・香りばし 100ml(400円前後)
- ・クワール 100g(400円前後)
- ・耐熱容器 500ml(400円前後)
- ・台盤（型に名前を書いて設置）
- ・ペン
- ・ラッピング（持ち帰り用） 500円前後
- ・ほろも

amazon通販より

※イメージ画像

図6 コンテンツ案①アロマ石鹸づくり体験



図10 アロマ石鹸を試作する学生
(2022年7月15日 筆者撮影)

陶芸体験

事前に作る物を決めておくor参加者が作りたい物を聞いて作る(取り組みやすさ)

①外部の人に依頼する

- ・実際に来ていただき、作り方から指導して頂く(出張)
- ・完成まで約1か月

②オープン粘土を利用する

- ・自分たちでキットを取り寄せ
- ・各自で焼くor学校のオープン(家庭科室)
- ・完成まで約2週間

手の感覚・手触り・指先の感触・冷たさなどを楽しむ
→自分だけの作品を作ることができる

例として、『夢冥窯』(浜乃木)→7月24日、17日は予約がとれなさそう
『麦風工房』(松江市玉湯町)→土曜は10~12時



図7 コンテンツ案②陶芸体験

コンテンツ案 ~音楽鑑賞~

鳥根県立大学の音楽系部活動・サークルに依頼(調整中)
→軽音楽部、吹奏楽サークル、ティンホイッスルサークルなど

大きなホールでのコンサートではないからこそできる体験を!

- ・楽器に直接触れて振動を感じる
- ・楽器演奏体験
- ・その場の全員で音楽をつくる(どんな楽器でも○)



図8 コンテンツ案③音楽鑑賞&演奏

農業体験

農作物の収穫や植えることを通した活動を行う
背丈が低かったり、植えるのが簡単なもの等、目が見えなくてもストレスがない体験に

ブルーベリーやトマトなど
これからの季節だと
トウモロコシなどがオススメ



- ・目で見えなくても匂いや触覚、味覚等他の感覚を通して楽しめる
- ・日常ではなかなか難しい体験を通して満足感を得ることができる
- ・植える→収穫でリピートしてもらえる

図9 コンテンツ案④農業体験



図11 集落にある三階建ての柿小屋
(2022年7月1日 筆者撮影)

が、手軽な兵糧として集落に持ち込んだのが始まりとされる(畑ほし柿生産組合 n.d.)。

現在でも手作業による丁寧な生産が行われており、集落に建ち並ぶ「柿小屋」に干し柿がつるされ、橙色の柿すだれが並ぶ光景は畑集落の独自の景観である。一方で、かつて26軒あった住戸は現在では17軒に減り、集落の高齢化と担い手の減少が課題となっている。集落の住民が東出雲観光バスとともに集落の活性化について検討を進めている中で、本プロジェクトのモニターツアーの開催地として協力いただけることとなった。また、体験コンテンツの実施会場として、同じく上意東地区にある「東出雲町おちらと村」に協力をいただいた。

モニターツアーの実施にあたり、7月上旬に事前視察を行った(図11)。生産地としての歴史性と

もに、山の緑と褐色の瓦屋根、そして柿小屋が織りなす集落景観の美しさ、吹き抜ける風の心地よさと鳥のさえずり、そして温かく迎えてくれる集落の人など、独自の魅力を持つ地域であることを実感する視察となった。

6. 「干し柿の里」体験モニターツアーの実施と検証

1) モニターツアーの実施

視察をふまえ、ゼミ内や東出雲観光バスとのミーティングを重ねツアーの内容を固めた(表2)。ツアーの実施に際しては、まず集落内での移動等、参加者の安全面への配慮について注意深く確認した。併せて、今回のプロジェクトのコンセプトである「障がいのある人もない人も楽しめる」こと、「五感で楽しむ」ことをツアーの内容に反映することに注意を払った。畑集落では古民家の縁側や柿小屋での滞在で風や音、香りを感じ、柿の摘果で柿の実や葉に触れ、アロマ石鹸づくりは香りを楽しむ体験と位置づけた。なお、ツアー当日は学生が2名1組に

なって参加者のアテンドを行った。

ツアー当日は猛暑日となったが、柿の摘果体験では、参加者は畑干し柿生産組合副組合長の富士本数彦氏から摘果のコツについて聞きながら摘果体験を楽しんでおられた(図12)。また、柿小屋では、畑集落での干し柿づくりの歴史について熱心に富士本氏に質問する場面もみられた。また、会場をおちらと村に移して行ったアロマ石鹸づくり体験では、学生たちが着色剤の色味や香りづけのアロマオイルについて丁寧に説明を行い、参加された方々が楽しそうに色や香りを選んでいく様子が印象的であった(図13)。

2) 検証

モニターツアー当日の最後に参加者にアンケートを実施した。コンテンツの内容について、参加者からは日頃体験する機会が少ない柿の摘果体験や柿小屋での滞在が印象的だったとの感想が聞かれた。したがって、「干し柿の里」を満喫する体験を提供するという点では、満足度の高い体験を提供できたも

表2 モニターツアーの概要

時間	体験	内容	伝えたい・感じてほしい価値	留意事項
13:00	(送迎)			当日の服装等をお伝えする ・帽子、タオル ・スニーカー(畑に入るため)
13:00~14:00	柿の摘果体験(短時間)	柿の葉収穫→アロマソープのラッピングに使用		雨天の場合は実施しない(摘果した実に触れていたかきながら古民家で滞在。雨の日の古民家もまた風情が美しい)
	・古民家で山風の空気感、古民家のなつかしさを満喫 ・干し柿づくりの歴史についてのお話(20分程度)	●飲み物など飲みながらお話(飲食時は要注意!) ・干し柿を食べながらゆっくり過ごしていただく ・どんなところで過ごしているのかを感じていただく <盲導犬> 縁側辺り	風の気持ちよさ 懐かしさ 集落の方との交流そのもの	古民家の雰囲気を楽しんでもらう(一方的に話すぎない、ゆっくりと滞在してもらう) 密を避けるため、滞在はツアーご参加の方々と学生を中心に。 飲食時は会話は控える&参加者同士の距離を確保。
14:00~14:45	柿小屋体験	●干し柿づくりの歴史と畑の干し柿の特徴 <盲導犬> 可能であれば同行、ただし梯子型の階段は苦手	柿小屋そのもの 風の気持ちよさ 集落景観の美しさ(「百年後に残したい景観百選」) 手間暇をかけた干し柿づくり(手作業、柿小屋を用いた乾燥など)	安全の確保 ・安全に登れる方法(登ること可能か、どのようなサポートが必要か)を確認 ・声掛け必須 ・前後に人を配置 ・一歩目の誘導が大切 柿小屋での滞在 お話を伺いつつ、風などを楽しんでもらう時間も確保する
~~移動(15分)~~				
15:00~16:30	おちらと村にてアロマソープ作り	●おちらと村の和室にて、ものづくりを楽しむ →「干し柿の里」訪問の思い出づくり <盲導犬> 体を拭いた上で同席	香り&リラックス 柿の葉の活用(石鹸に入れたり、ラッピングに使ったり)	・楽しんでいただくために(事前に色や香り、完成イメージを分かりやすく説明) ・安全に行う(やけどの恐れがある行程は学生が行う) ・時間内に完成しなかった場合に備えて、持ち帰り用を事前に準備(3組6名株分)
	アンケート(20分程度) ※アロマ石鹸が固まるのを待つ時間で実施			
17:00	(送迎)			



図12 柿の摘果体験をする参加者
(2022年7月29日 筆者撮影)



図13 バットに流し込んだアロマ石鹸の型抜き
行う参加者 (2022年7月29日 筆者撮影)

のと考える。また、これらの体験について、いずれもゆったりと時間を取って体験できた点が良かったとの感想が寄せられた。一方で、畑集落では屋外やエアコンのない場所での滞在が主となったため、この点は再考が必要な点といえる。

学生が主催したツアーという点に対する評価では、学生たちの介助が大変良かったとの評価であった。参加者と学生が交流する様子を見ていても、参加者の方から学生に対して介助の際のポイントを伝

えてくださったりと、学生たちをリードするかたちで自然と会話が弾んでいた。また、実施後に学生たちで行ったふりかえりでは、学生たちからは、介助という点では不慣れなことで十分にできなかった部分があるが、参加者と一緒に自身も楽しめたことが良かったという感想が聞かれた。一方で、介助者として参加してくださった方々については、一参加者としてというよりも介助者としての振る舞いを強いてしまったのではないかという意見も出された。「障がいのある人もない人も楽しめる」というコンセプトのもと実施したとしても、やはり障がいのある方への配慮として欠かせない部分はあり、「すべての人が楽しめるよう創られた旅行」という「ユニバーサルツーリズム」の理念の限界や矛盾を感じる事となった。

とはいえ、参加者と学生の双方が「交流」に満足や楽しさを感じたということからは、その場にいる「すべての人が楽しめるような観光」の実現には、「ともに楽しもうとする姿勢」や「共感」、「相互理解」といった要素が重要なことが示唆された。今回のモニターツアーであれば、「五感で楽しむ」というテーマを設定したことで、ユニバーサルツーリズムの対象者として設定した視覚障がい者だけでなく、ツアーを企画しアテンドした学生たちも「参加者の楽しみ方」を知ること一ひいては「自分とは異なる他者を知ること」一を通して自身も楽しむ（＝自己の中に気づきや小さな変革がある）という関係が生まれているのではないだろうか。

吉田ら（2016）も指摘していたように、観光の本義は交流である。そうした時、ユニバーサル「ツーリズム」には、多様な人々が交流する機会を生むことで「共感」や「相互理解」を育む役割が期待されているといえよう。

7. おわりに

コロナ禍によりすべての人々の移動が制限される状況の中で、図らずも移動の自由や観光の自由について考える状況が生まれた。学生たちにとっては、「観光の権利」という大きなテーマについて身近に考える機会となった。今回の取り組みは、大学

生(大学)が地域や事業者などと連携して観光に取り組むことの意義を感じるものであった。モニターツアーの企画・実施といったことは一つのゼミ単位でできることではなく、理解ある地域やノウハウを持った事業者、そして行政やNPOといった組織のサポートなしには実現し得なかった。本プロジェクトの実施に協力いただいた多くの方々に改めて感謝申し上げたい。

注

- 1) 全10条で構成されており、観光分野における人間(特に子供)の搾取への撲滅、自然環境の保護、観光客に対する誠実な情報提供、労働者の基本的権利の保障、文化遺産の価値向上への貢献、受入国や地域社会に有益な活動の実践など責任ある持続可能な観光を実現するために、各国政府、観光業界、地域社会、旅行者等の観光産業の発展に携わる関係者が自発的に取り組む事項が定められている(国連世界観光機関, 2021)。
- 2) 「観光の権利」に関しては大橋(2016)の論考に詳しい。
- 3) たとえば、密を避けるため工夫はオーバーツーリズムの課題と結びつくことで魅力的な観光地域づくりに示唆を与え、自宅から1~2時間程度の移動圏内で行うマイクロツーリズムは地元の魅力を再発見するきっかけとなっている。また、オンラインツアーの普及はこれまで観光に行くことができなかつた人々に疑似的ではあるが観光の機会を提供している。
- 4) 本共同プロジェクトは、東出雲観光バスの森山雄宇氏(代表取締役社長)と山陰地域の観光の活性化やウィズコロナ/アフターコロナの観光について意見交換を行う中で実現したものである。産学連携による観光実践であるとともに、学生のキャリア教育の一環としての観光教育の要素も併せ持つ取り組みである。
- 5) 名称は異なるものの、同じ機能を持った組織は全国で50箇所ほどある(伊藤 2022)。
- 6) インスタグラムには、スクリーンリーダーでイ

ンスタグラムを開いた際、投稿されている写真を音声で読み上げる「Alt(代替)テキスト機能」というサービスがある。この機能を使うことで視覚障がいを持っている人でもどのような写真であるのかを把握することができる。本プロジェクトでもこの機能を付して投稿を行った。

引用文献

- 秋山哲男・大西康弘・佐藤貴行(2013)「観光困難階層にとってのユニバーサルツーリズム」『観光科学研究』(6), 111-125.
- 伊藤薫(2022)「バリアフリー観光の推進に関する一考察」(国際観光学会 福祉観光研究部会 研究発表会 配布資料, 2022年7月6日)
- 大橋昭一(2016)「「観光の権利」をめぐって」『観光学』(15), 35-38.
- 観光庁(2022)「ユニバーサルツーリズムについて」(<https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/sangyou/manyuaru.html>, 2022年9月20日最終アクセス)
- 国連世界観光機関(UNWTO)(2021)「世界観光倫理憲章及び関連文書」(https://unwto-ap.org/wp-content/uploads/2021/06/GCET2021_H.pdf, 2022年9月20日最終アクセス)
- 畑ほし柿生産組合(n.d.)「集落で守り、受け継ぐ伝統」(<https://www.hatahoshigaki.jp/>, 2022年8月3日最終アクセス)
- 広瀬浩二郎(2017)「ユニバーサル・ツーリズム」とは何か: 共同研究: 「障害」概念の再検討: 触文化論に基づく「合理的配慮」の提案に向けて」『民博通信』157, 16-17.
- (2020)『それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける! ——世界の感触を取り戻すために』小さな子社
- 吉田順一・山川拓也・松山千紘(2016)「日本における「ユニバーサルツーリズム」概念の再検討」『日本観光研究学会全国大会学術論文集』(31), 401-404.
- COTRAVEL(コトラベル)(<https://www>.

cotravel.jp/、2022年8月3日最終アクセス)

付記

本研究は、JSPS科研費（課題番号22K12607）の研究成果の一部である。本プロジェクトの実施にご協力いただいた皆さまに御礼申し上げます。

（受稿 2022年9月30日，受理 2022年11月9日）

